

椎名麟三全集



小説
5

冬樹社

椎名麟三全集 5

昭和四十六年三月十五月初版第一刷発行

著 者—椎名麟三

発行者—高橋直良

発行所—冬樹社 東京都千代田区神田神保町二—一八

電話東京二六四—〇三四六 振替東京七七五七

印刷所—三容堂印刷株式会社

製本所—一重製本株式会社

装幀者—栃折久美子

写 真—石井彰

定 価—二〇〇〇円

© Rinzo Shina 1971

0391-02005-5190

第五卷目次

誤 解	3
少女の怒り	27
哀れな情熱	45
自由の彼方で	65
紙縫りの紐	209
母の偶像	229
事件の終末	257
疑わしき贈物	275
愛と死の谷間	299
冬の日に	337
繋がれた犬	365

小説
5

誤 解

1

加藤広吉は、ラッシュアワーの人々に押されながら、下北沢の駅の改札を出た。彼は、駅員に見せた定期を上衣のポケットへ入れると、習慣的に腕時計を見た。五時三十五分だった。彼は満足だった。いまの製薬会社へ勤めるようになってから二年になるが、会社を終って下北沢に帰りつく時刻の、統計的な平均値が、五時三十五分だったからである。彼は、今夜つける日記のことを考える。『八時十分出勤。五時四十分帰宅。記事なし。』そしてまた彼は、広い記事欄の空白に、記事なし、と書くときの喜びを考えるのである。月給が千円上ろうが、内閣が変わろうが、自分がどんなひどい目に会おうが、彼は、こう書くのである。『記事なし。』三ヵ月前、自分の下宿しているいまの家の娘と一緒にあった日も、そう書いたのだ。そして彼は、そのように、『記事なし』と書き得る自分を幸福だと思うのである。

広吉は、駅の階段を下りて行った。あたりはもう暗くなっていて、商店の灯が眩しくつづいていて。彼は、

その灯を背にするようにして、左へ折れた。そこに新しい映画館があった。昨日と同じモギリ嬢が、入口のボックスに腰を下していた。十七かな、それとも十八かな、と考える。昨日と同じように彼には見当がつかない。だが彼は、昨日と同じように足早に歩きつづける。やがて彼の降りた下北沢のホームが左手に見える踏切を渡って行く。あたりは急にほの暗い住宅街になる。彼は、しばらくして右に曲る。そのせまい道は、真暗だ。両側に四、五軒の家がならんでいる。彼は、その端の小さな二階建の門の中へ入って行き、玄関をあけた。ベルがやかましい音をたてた。広吉はいった。

「ただいま」

静かだった。いつもそれに応ずる筈の聲が、二つともなかった。ひとつは妻の高子の声、ひとつは高子の母親の徳子の声がしなければならぬのである。彼は、靴をぬぎながら、もう一度大きく繰り返した。

「ただいま」

広吉は、二階へ上ろうとして、茶の間をのぞいた。高子と徳子が、ちゃぶ台をはさんで坐り込んだまま、広吉の方を、恐ろしそうにじっと見ていた。二人は、夕飯の支度もしないで何か重大なことを話し込んでいたようだった。彼はいった。

「どうしたんですか」

二人は、いい合せたようにだまっていた。その沈黙のなかには、明らかに彼に対する許しがたい拒否が感じられた。またおれは、単なる下宿人に逆戻りか、と彼は微笑した。彼は、そのまま二階へ上って行った。徳子は、ほんと緊張をゆるめると、口ぜわしく囁いた。

「広吉さんは、ほんとに年、三十二なんだろうか、……年も嘘をついているのじゃないのかしら」

高子も、囁くように答えた。

「それだけはほんとじゃなくて？ 入籍するとき戸籍謄本を見たわ。大正十年生れだったわ。……どうして」

「どうしてって……お前！」

徳子は、いま、この部屋をのぞいたときの広吉の微笑を思いうかべた。それはいつも広吉の口のあたりにあらわれている微笑だった。それは絶えず冗談をいうきつかけを待ちかまえているような微笑なのである。しかし、と徳子は考えるのであった。あんな笑い方をする男は、高子には判らないだろうが、四十すぎの男なのだ。苦勞をし抜いた、四十男でなければ、あんな笑い方が出来るはずはない。徳子は、ふたたび口ぞわしい声で囁くようにいった。

「戸籍謄本だって、嘘をつくことが出来ますよ。……ずっと後に生れたことにすればいいんだからねえ」

高子は、だまっていた。やがて大儀そうに立上った。徳子は、びっくりした、おびえた声でいった。

「お前、どこへ行くの？」

「御飯の支度、してないのよ」

「御飯？ ……そうだねえ。……でもわたしは、あんなものを見て、もう少しも食べる気がしない」

「わたしだって、そうだよ」

「あんな男、お前の婿にするんじゃないかった」

高子は、だまって台所へ行った。高子の頭に、家へ帰って来る広吉の姿が思いうかんでいた。彼は、快活に歩いていた。中折帽を真直ぐにかむり、ズボンにはいつもきちんと折目がついていた。あのひとは、わたしの家へ来たときからそうだった。そしてどこか生真面目なおかしさがあった。また実際冗談が好きだったあのひとは、よくわたしを笑わせた。そのせいか、わたしははじめから親しさを感じていた。けれどもたしかに、ただそれだけだったわ。母が一緒になれといわなければ、前の下宿人の米田さんのときと同じように、

何事もなかったにちがいないわ。徳子が、台所へ入って来て、高子の炊事を手つたいはじめた。徳子は、思ひあまつたようにいった。

「お前、どうする？ ……広吉さんに、あの押入れのなかのものを聞いて見る？」

「あれ？ ……いやねえ」高子は、顔をしかめた。「でも、聞いて見るわ」

「用心するんだよ。嘘をつくかも知れないからね。わたしは、あの男を少しも信用出来なくなってしまっているのよ」

2

広吉は、茶の間に降りて、食事をしはじめた。和服姿の徳子と青いジャケツ姿の高子は、どちらも食欲がないといって、彼の両側に坐っているだけであつた。たしかに二人の様子は、一変していた。彼は、食物をとる精神状態について、二人の医者からいかめしい精密検査をされている気がした。自分に関して何かあつたことは、たしかだつたが、それが何であるか、考え出すことは出来なかつた。彼は、もう一度首を傾けながら徳子へいった。

「おかあさん、何もないとおっしゃるけれど、とにかく変ですよ。どうも僕は、知らずに何かとんでもないことを仕出かしているらしい。さつきからご飯が、食道の噴門から先へ行かないんですよ。たしかに何かあつたにちがいないんだが。……どうです。物は相談だが、一寸、いってごらんになりませんか。案外誤解かも知れないし、本当のことなら、僕は、あやまりますよ」

徳子は、相談するように、高子へ素早く視線をおくつた。徳子の眼鏡が、きらりと光つた。高子も、素早

く視線をかえした。徳子はいった。

「何もありません」

「絶対にありませんか」

徳子の態度に動揺が見られた。しかし徳子はきっぱりといった。

「絶対にありません」

広吉は、その徳子の言葉を信用していなかった。彼は、ちらりと徳子の顔を見た。瘠せた長い顔が、蒼白にひきしまっていた。若いとき、夫に死別して以来、ずっと独身を通し、小学校の教師をしながら、高子を育てあげた勝気が、その顔に感じられる。彼は、自分の妻を見た。暗い眼を伏せるようにして、むっと口をむすんでいた。広吉は、やっと一杯の飯を片付けると、早々に二階へ退却した。実際、飯が食道につかえていて苦しく、階段を上りながら、何度も胸を、とんとんとたたいた。

広吉は、机の前へ坐った。それから煙草に火をつけて、部屋のかなや天井をしらべた。古い建物だが、がっしり建ててあった。壁にもゆるみが見られなかった。彼は、この家で二十年近く暮して来た母娘を考えた。あの二人は、おれなんかいなくても、岩のように堅固に、彼等自身の生活をつづけて行けるにちがいない。そしてあの二人が、それを信じているということは、疑のないところだ。ただ残念ながら、絶対的にそのような生活がつづけられるかというと、そうではないんだが。すると彼は、階下の二人の女に愛を感じた。現に、おれがその証拠だ。高子に夫を持たせなければならなかったのだから。とにかくあの母娘に、一時でも「男」が必要だったんだから。彼は、そのときのことを思いうかべた。徳子の家を狙っていた地主が、徳子が彼の計画に応じなかったので、そのいやがらせに、門から道路へ出る道を、私道だといって、ふさいでしまったのだ。区役所へ行っても、法律相談所へ行っても、その地主の行為は、合法だといわれた。示談

にするより手はなかった。しかしそのとき、徳子たち一家と地主は、感情的に対立してしまっていたのである。誰か第三者で、徳子の家の利益を考えてくれる者が必要だった。広吉が、その役を買って出た。実際彼も、下宿への出入りに困っていたからである。その事件が、道路に相当する地代を払うということで落着いたとき、徳子は洩した。

「わたしも、年をとったせいか覇気がなくなっちゃって、……これからわたしの家にも男が必要だということが判りましたわ」

広吉は、高子との結婚の話があったとき、会社の同僚にその徳子の言葉を話した。同僚は、そんな考えをもって婿にしようなんて、馬鹿にしてるじゃないか、やめろ、やめろ、と忠告した。しかし彼は、笑っていた。彼は、そんな母親の考えを変えることが出来ると思っていたからであり、結婚の話がもち上ってから、高子を受しはじめていたからである。だが結婚してみても、彼のたたかわなければならぬもっと大きいものがあるのに気がついた、それは、妻とその母との関係が、鉄壁よりかたいということであった。生活は、母娘の間だけで進行し、近所のつき合いや、屋根の瓦一枚直すことさえも、彼に相談なしに行われた。というよりも、彼には何事も相談されたことはなかった。結婚前と、彼の生活に於て変化があったとすれば、月末になって給料袋ごと渡さなければならなくなったこと、そして高子が、自由に彼の部屋へ出入りするようになった、ということぐらいのものであった。しかしやはり高子は、夜も階下で母と一緒に寝るのである。彼は、その点について、徳子にしばしばその変更をもの柔かく頼んだ。

「とにかく夫婦なのですから、高子と一緒にの部屋に寝起させて下さいませんか」

それに対する徳子の答えは、いつもこうであった。

「高子が、わたしと一緒にねたいというのですよ」

彼は高子に、そのことについてたずねた。すると高子は、こう答えた。

「お母さんが、そうしてくれとおっしゃるからですわ」

そこで広吉は、戦術をかえて、三人で食卓をかこんでいるときその問題をもち出した。すると二人は、急にだまってしまったのである。その二人の沈黙のなかには、第三者には通じない頑強なものがあつた。彼は、その頑強さに何か病的な異状ささえ感じたくらいであつた。それで彼は、いつか高子へ、遠まわしに、高子の血筋に精神病者がいたことはなかったか、とたずねて見た。しかし高子は、そんなひとはいないと答えた。そして今日まで三ヵ月経っていたのである。そのような二人の女の態度は、彼にとって、苦痛であつた。しかし彼を失望させることは出来なかつた。彼は、その母親の態度を、やがて変えることが出来ると信じていたからである。というのは、どんな人間関係でも、変えることが出来ないものはないからであつた。

気がつくと、置時計は、八時をさしていた。今夜は、高子は、寢床さえ敷きに来てくれないようだつた。

仕方なしに、彼は、自分で蒲団を敷き、階下へ用を足しに行つた。徳子と高子は、まだ茶の間にいるらしかつた。口ぜわしいひそひそした囁き声が、階段の彼の足音にぴたりとやんだ。彼は、小用を足して、ふたたび茶の間の前を通つたとき、襖の向うは、ひっそりしたままだつた。彼には、息をつめて、じつと彼の様子をうかがっている二人の姿が見えた。彼は、合点が行かなかつた。彼は、何となしに手を見た。手は、あつた。しかしおれの手がなくても、彼等にとって別に深刻なことはいはずだ、と彼は、微笑した。たとえおれが死んだって、あのような彼等には、何のこともないではないか。彼は、笑いながらいつた。

「おやすみなさい」

広吉は、二階へ戻つて来た。彼は、机に向つて、日記をひらいた。そして今日の天気と、出勤と帰宅の時刻を書き入れると、縦十五糎、横十糎の空白を、いささかの拒否といささかの愛とを交えながら、楽しみに

眺めた。やがて彼はそれへ書いた。『記事なし』

すると彼は、強い感動に襲われた。彼は、五年間、毎日書きつづけて来た字を見ながら、微笑をもって考えた。とにかく残念なことは、この地上に於ては、たとえ記事がないと書いても、それが一つの記事であるように出来ているのだ。事件がないということが、一つの事件であるように。幸福であるということすら、一つの不幸であるように。彼は、この人間のおかしさに、生真面目な同意を感じながら、寢床へ入った。彼は百万円の金を拾った夢を見た。

3

翌日、広吉は、昨日と同じように、八時十分に家を出た。徳子は、広吉が出かけると、二階へ上って行った。彼女は、押入れをあげた。彼女の目差す小さな柳行李は、昨日と同じ場所にあった。広吉の手を触れた形跡はなかった。彼女は、それを押入れからとり出した。いつの間にか、高子が上って来て、とがめるように、低い声でいった。

「お母さん！」

徳子は、ぎょっとしたように振向いた。そしてそれが高子だと判ると、腹立たしそうにいった。

「びっくりするじゃないか」

「もう、およしなさいよ」と高子は、思い疲れたようにいった。「わたし、昨夜、眠らなかったのよ」

「知っていますよ。わたしだって眠らなかったんだから」

徳子は、その行李の蓋をとって、少しばかり後ずさりしながら、なかをのぞいた。髑髏も写真も、昨日と

同じ位置にあった。髑髏は、半ば口をひらいていた。齒ならびが美しかった。その髑髏のそばに、顔だけうつした若い女の、引き伸ばし写真があった。やや丸顔で、うれしそうに笑っていた。徳子は、その写真をその髑髏にあてながら、興奮した声でいった。

「ほれ、お前……齒から顔の形から、そっくりだよ！」

高子は、その髑髏と写真との対比に、ふいに戦慄を感じた。彼女は何から引き裂かれたように叫んだ。
「よして頂戴！……いやな気がするわ！」

高子は、物干台へ出た。空は晴れていて、十月の日の光があたたかだった。眼の下の方では、赤ん坊が泣きしきっていた。小田急のときどき通る音がきこえた。彼女は、理由のない残酷さにうちのめされたようになっていた。あの若い女の、されこうべと写真。あれと一緒にあるということが残酷な気がするのか。いやそうではない。あんな女のことを大事そうにもっているあのひとがわたしに残酷な気がするのか。いいえ、そうでもない。あのひとが、あんなものを持っていながら、平気な顔でにこにこしていることが、人間として残酷な気がするのか。しかし、やはり高子には、そうでもない気がするのだった。といって、高子には、やはり何かが許せない気がするしかなかった。徳子が物干台へやって来て、気おくれした声でいった。

「どうしたもんだろうねえ。……ほんとにあの女は、広吉さんの女なのかい？」

「それにちがいないわ。……あのひとのこと、わたしと一緒にいる前に、話したことがあったわ。空襲で死んだといっていたわ。……死んだというので、わたしあまり気にもとめていなかったのだけれど。……行李、元通りにしておいて？」

「ああ、ちゃんとしておいた」

「いやねえ。……わたし一ぺんにあのひときらいになってしまったわ」

徳子は、しみじみした声でいった。

「そうですよ。……わたしがいつもいうように、わたしたちが親子だつていう以外には、何も信用出来ないのですよ。夫婦だつて、別れてしまえば、赤の他人だろう。それが親子だつたら、はなればなれになつていつて、どこでどうしていようが、やはり親子は親子だからねえ。わたしからお前が生れたということだけは、法律だつて、どうすることも出来ないことですよ」

徳子は、遠い昔、小学生を連れて、小石川の植物園へ見学に行ったときのことを思い出した。温室に蠅取草があつた。高さ二尺位の草だつた。その楕円形の葉には、とげがあつた。蠅を入れるとその葉は、両方から動いて蠅をはさんだ。消化して植物の栄養となるのだ。子供のひとりが、小石をその葉の上においた。葉は機械的に活動し、それをはさんだ。しかし間もなく、その葉は元のようにひらいて、その小石を吐き出したのである。徳子は、自分たちは、あの蠅取草のようなものだと思つた。広吉を包んで自分たちの生活へ消化させようとしたが、広吉は、自分たちにとって小石のような異物だつた。その証拠を、わたしはあの行李のなかに見たのだ。そして異物は、吐き出さなければならぬのである。すると徳子は、その蠅取草のもつている自然に優美な感情を感じた。徳子は昂然とした気分になりながらいった。

「お前が、あの男と別れたいと思つてゐるのなら、わたしから話してみてもいいんですよ。ほんとうに、あの男は、おかしなところのある男ですからねえ」

高子は、だまつていた。